

【西の市】縁起物の熊手で福をかき込む

十一月の酉の日、各地の鷺（大鳥）神社で祭礼が行なわれ、市が立つ。それを西の市といい、古くは「とりのまち」と称した。その「まち」は祭りがなまつたものといわれている。十一月中に酉の日は二回ないし三回あり、それぞれ「一の酉」「二の酉」「三の酉」と呼ばれる。三の酉まである年は火事が多いとの俗信がある。そのいわれについては、酉（鶏）のトサカの赤からの連想によるなど、諸説あるようだ、はつきりしない。

東京および周辺には鷺（大鳥）系の神社が多い。その本社は大阪府堺市にある大鳥神社おおとりじんじゃと考えられている。しかしこの本社では、西の市は開かれていらない。西の市は東京都足立区花畠（旧・葛西花又村）にある大鷺神社に始まつたといわれている。十八世紀の後期になると吉原遊郭に近い浅草の鷺神社の酉の市が人気を呼んだ。

酉の市が立つ神社の境内には、縁起物の熊手くまてを商う露店がずらりと並ぶ。熊手は本来は落葉やゴミを集める道具。酉の市の熊手は福をかき込むという意味から縁起物となつた。その熊手はさらには千両箱、お福面、大判小判、恵比須、大黒など、縁起のよいもので飾られている。

「煤払い」昔は煤払いが終わると胴上げをした!?

「ぜにかね金がこうたまればと十三日」という江戸川柳がある。その「十三日」は十二月十三日のこと。近世以降、この日は歳末大掃除の日で、煤払い、あるいは煤掃きなどと呼ばれていた。大掃除のゴミの山を見て、錢金もそのように溜まつてくれればなあと思う……。

その十三日だが、なぜ十三日なのか。江戸城では十二月十三日が大掃除の日であつた。それにならつて、武家や庶民もその日に大掃除を行なうようになった。十三日は「正月迎え」「事始め」などとも呼ばれ、正月の準備の開始日でもある。煤払いは家をきれいにして年神さまを迎える仕度のための神聖な行事でもあつた。

煤払いの日には、その昔、胴上げの風習があつた。煤払いが終わると、武家や商家などでは御祝儀ごしゅぎとして、誰彼なくつかまえては胴上げをした。この胴上げは川柳によく詠まれており、嫁や下働きの女性などが標的にされること多かつたようだ。「十四日嫁はきのうの腹を立て」という川柳がある。胴上げされると、着物の裾よがまくれ上がつたりして、恥ずかしい思いをする。嫁が腹を立てているわけは、きのう（十三日）胴上げをされたからである。